

# 第4回 あおもり立志挑戦塾

平成24年9月1日(土)～2日(日) 於:十和田市「洗心荘」

## □天明塾長挨拶「運が味方する生き方」

今日は「運が味方する生き方」についてお話しします。「あおもり立志挑戦塾」は青森を良くしていくリーダーを育てようということで開催していますが、「運を味方にする」ことはリーダーとしてすごく大事なことです。

松下幸之助さんの若い頃の話ですが、ある日栈橋を歩いていたら、向こうから酔っぱらいが来てぶつかってきて海の中に落ちたんです。そこにたまたまポンポン船なんか来て救ってもらった。冬の寒い時期に海に落とされて、その時松下さんはこう思ったというんですね。「何と俺は運の強い男だろう。もしポンポン船が来なかったら自分の命は無くなったかもしれない。本当に運が強い」と。普通は「何で酔っぱらいが来て俺が落とされなくちゃいけないんだ。ついてないな今日は」と思うところだけど彼は違った。あの人は体が弱かったし、高校とか大学とかにも行ってない。でもそれを自分自身につきがなくて考えないで、逆に自分はずいている、余計に勉強をしなくちゃいけない、と思ってそれで一生懸命勉強して大成したんですね。

ノーベル賞を取った人の話を聞いてもそうです。「実力で取れました」という人は誰もいない。「本当に運です。奇跡に奇跡が重なったんです。本当に有り難いことです」というコメントが多いよね。オリンピックの競技だって実力は皆伯仲だ。その中でどっちが勝つかという世界ですよ。すごい力があるのに当日力が出せなかった人もいる。だから運を味方することはすごく大事なことです。

運を味方に付ける方法はあるか。私はあると考えています。それは想念、感謝、先祖、積徳、言霊の5つを大事にするということです。今日は、想念、感謝、言霊の3つについてお話しします。

まず想念です。人生は思ったとおりにならないと考える人は実際に思ったとおりになってない。でも少し考えれば、これは自分で考えたとおりになってきたということじゃないか？ 引き寄せの法則って聞いたことありますか？ 引き寄せるというのは思いがまず先にある、その思いに結果が引き寄せられるということ。病気が治ったと想えば肉体がそれに反応してくるというわけだ。

問題は潜在意識で想わなくちゃいけない。潜在意識に回路を作り上げる。強く想えば潜在意識に回路が出来上がってくるということなんです。

続いて感謝です。嫌なことでも感謝で受け止めるとい

うことです。財布を拾ってもらって「ありがとうございます」は当たり前のこと。そうではなくて嫌なことがあった時、病気になった時、事故に遭った時に「これで良かった、ありがとう」という気持ちが感謝なんです。

「なぜ？」って思うよね。それは起こったことは全ては必然、必要、チャンスという考え方にあります。必然というのは原因があるから結果があるということ。病気になった、事故に遭ったというのは何かそこに原因があったということですね。

必要というのは、自分になぜ起きる必要があったのかということ。神様は人間に言葉で教えることはできないけど、何か事を起こして、事件を起こして、天災を起こして私達に知らしめるという考え方があります。これを垂示と言います。例えば東日本大震災は、私達に色々なことを教えるために起こったんじゃないかという考え方ですよ。

チャンスというのは、なぜ起こったかを考えるきっかけ、チャンスが生まれるということですね。



花が咲くということはその前に種があったということ。大事なことは、花が咲いたということはそこで種が無くなったということです。そうでしょう。芽が出て花が咲くともう種は残ってない。では例えば車の事故に遭ったことを花が咲くと考えて、その昔自転車を倒して子どもに傷つけたことがあってそれが種だと考えると「ああ、あの時子供にあんなことした」とか「人を傷つけた。だから今自分が車で傷つけられたかもしれない」という考えることもできますよね。実際の原因は分からないよ。でもそれを原因と考えると「事故に遭ったの原因は自分にあったのかもしれない」と考えれば「自転車で子どもを傷つけた」という種はそこで無くなる。

でも事故に遭った時「何であのバカ、俺が真っ直ぐ運転してるのに途中から急に出てきてあいつはバカだ」と

か人を恨んでいると、種を反省していないということになる。種はそのまま残っている。そしてまた悪いことが起きて、人を恨んで種をそのままにしていると、この恨みがまた種になって次の結果をもたらす。またその種も残る。悪循環ですね。こういうのを罪重ねと言います。

嫌なことが起こった時こそ感謝なんです。なぜか？それは起こったことで原因、つまり種が消える。だから感謝が大切なんです。

続いて言霊です。感謝の言葉はありがとうございます。言葉には魂が宿っていることを先人は言霊と言ってきた。私も薄井先生から「嫌な言葉、汚い言葉は使っちゃダメだ。いい言葉だけ使うんだ。バカとかクソ暑いとか使っちゃいけない」と言われたものです。「お陰様、ありがとう、もったいない、ごめんなさい」。以前、言葉は波動だ、挨拶は相手との同化だ、人を動かすんだという話をしましたが、この4つの言葉はものすごくいい波動を持っている

ます。普段からこの言葉を沢山使うことによって、次々といい循環が生まれてきます。運が味方してくるんです。

ところで、運は実力や能力より優先するんだと言った人がいます。斉藤一人さんという人御存知ですよね？「銀座まるかん」という会社で青汁ジュースなどを作っていて、10何年間長者番付10位以内を続けている社長さんですが「俺の能力はたいしたことはない。実力もない。研究機関も持ってない。だって社員5人しかいないしコンピュータもない。うちの会社で一番進んでいる機械というのはFAXなんだ」と言っています。これも運を見方につけた生き方ということでしょうか。

以上、運を味方につける方法、運が味方する生き方についてお話をしました。信じるか信じないかは別にして、皆さんなりに考えてほしいと想います。

## □講話

講師 山岡 義典 氏 (NPO 法人市民社会創造ファンド運営委員長代表理事、認定 NPO 法人 日本 NPO センター顧問)

題名 「新しい公共」の意味と NPO の役割を考える～地域社会を起動させるために～



皆さんこんにちは。山岡義典と言います。

僕の人生は、この道一筋でもなく波瀾万丈でもなく、淡々とリセット人生を送ってきたというのが適切な表現かと思います。

1964年に大学を卒業し、大学院で都市計画の研究と実践をやりその後設計事務所に入りました。歴史的環境・保存問題に取り組んで、仲間と古墳とか日本中の街並みを歩いていました。街並みの保存で日本の最初の例として、婦恋というのが木曽路にあるんですが、そこの保存運動や保存事業、大阪万博の会場計画とか海洋博など様々なプロジェクトに関わってきました。

その後都市計画稼業を廃業し、豊田財団というところでプログラムオフィサーとして、企業フィランソロピーの新しい形を求めて色々面白いことをやりました。その中で日本の社会はどのような方向に向かっているのか、こ

れからどうしないといけないかを色々考え、全国のような地域を歩きながら考えたんですね。

50歳の時にそこを辞めましてフリー宣言しました。本当はずっとフリーでいたかったですけれども、NPOの仕組みについて豊田財団にいた頃から色々研究をしたり実践をしたり、また国へも提言してNPOセンターを設立しようということで、僕が提言した手前もあってその代表理事を務めました。この6月末で代表理事を辞め今は顧問という立場です。

僕は大体15年くらいで飽きに来るんだな。15年くらい経つと次のことがやりたくなる。というよりそろそろ辞めた方がいいだろうという気持ちになる。その後法政大学でNPOのことを教えたりと、人生の節目節目でリセットしながら生きてきました。

今日はここ数年前から言われている「新しい公共」ということ、あちこち言われていてかなり誤解もあるんですがそれについてお話しします。

新しい公共とは、官だけではなく市民の参加と選択の下で、NPOや企業等が積極的に公共的な財やサービスの提供・供給主体となって、医療・福祉・教育・子育て・まちづくり・学術文化・環境・雇用・国際協力等、身近な分野において共助の精神で行う仕組みを持つということになっています。

要は今までの公共は役所が担うものだったがそうではなくて、もっと民間も公共になるべきだということですね。これからの日本を支えていく重要な柱が新しい公共



なんだということです。これをしっかり創らないといけないということなんですね。もう少し詳しく言うと従来の公共は、国家、都道府県、市町村があって、さらに外郭団体的なもの、公益法人とか、特別区とかあって、それぞれがきちんと法律によってやるのが決まっていたんです。そして市民、国民、あるいは企業に対して、社会サービス、企業では提供できないサービスを提供してきたんです。ちなみに日本では、公益とは官庁にとって利益になることが公益だという概念があって、公益法人は許可で設立が認められるという制度なんです。アメリカ、イギリスの人は主務官庁というのがあると言ったりします。これが従来の公共という考え方ですよ。

新しい公共とは、色々な団体がそれぞれの思いで社会に役立つと思うことをやります。その何気ない集合体が、結果的に1つの公共を作ります。これこれについては何をやる、何をやっちゃいけないとかの一定の制約はありますが、基本的にはそれぞれが思い思いの価値観で、様々な形で社会のために役立つことをやるということなんですね。

ということは、市民一人ひとりボランティアで参加したり寄付をしたり、あるいは団体の会員になって会費を納めたり、また企業はボランティア休暇制度で色々な人間を出したりといった活動が、全部任意で行われるということなんです。法律によって義務付けられていない活動の全部が任意です。ですから基本的に健全なんですね。



例えばある団体は、自然の緑地を守る活動を行うけれども、それは義務があるわけではない。もちろん十和田八幡平国立公園というのは、これはちゃんと法律に基づいた公園でそれを守るという義務はあります。しかしそうじゃないところ、例えば「あの森は綺麗だね。何とかしようよ」という人がいれば、任意にそこを保存するための取組をするとか、保存のためのボランティアとか、寄付を企業に仰ぎながら森を守っていくとか、そういう任意の活動ですね。里山保全なんて大体そうやって生まれてきたものです。いわば強制的に集められた税金で法律に基づいて行う従来の公共に対して、個人が様々な思いで行う任意の公共というものがある、これからの社会で大きな意味を持つてくるということなんですね。

同時に最近話題になっているのは、官と民との協働と

いう関係ですね。政府が一定の資金的な裏付けをする一方で、民間のNPOは自主的にNPOのノウハウを持ってやろうというそういう関係です。協働とか提携とか協力とか色々な言い方がありますが、相互に監視したり監督したり許認可をしたりしながら、一方で一緒に手を繋いでやっていきましょうという関係ですね。またアドボカシーと言って、NPOが自分達のやっていることをもっと社会に広めていこう、そして選挙を通じて社会を動かしていこうという形で影響力を及ぼしていく、こういう関係もこれから増えてくると思います。

新しい公共の概念は、これまでお話したとおりなんです。社会の方にどんなニーズがあるのかということが問題なんです。しかしニーズというのは最初は目に見えません。見えてきてはじめて気が付くものですよ。「えっ、そんなことが必要なの、そんなことまでしなくてもいいでしょう」というのが多い。例えば不登校の子供達を受け入れるフリースクールなんかは、始めた時は相当の反発を食らいました。学校で義務教育をやっている時間帯に、なんで学校に行けない子供をこっちに入れることができるんだという反発ですよ。でも今やフリースクールは沢山あります。このようにニーズは最初は見えません。しかし目の前の問題に対応しているうちに、次第にニーズが顕在化してくるんです。

どのようなニーズであっても、最初の問題意識は個人から始まりますよ。でも個人の情熱、パッションだけでは駄目なんです。個人だけでは社会はあまり変わりません。個人から組織へ移行させていく、その過程でどれだけ人を巻き込めるのかというのが大切です。「あの建物はとてもいいね。保存しよう」というのは最初は個人のパッションから始まります。でも「そうだね。私もそう思う」という人が集まって組織にならないとあまり社会は変わらない。「この建物は、こんなに楽しく使える。こんなにいい場所にある。こんなに大事なんだ」ということを周りが理解してはじめてそれが組織に繋がっていくんです。

課題を明確にして行動へと移すための決意をする、これがミッションです。ミッションというのは作っただけで飾っていてもしょうがない。ミッションの実現に向けて走らないと意味がありません。しかし走るのにミッションが見えないと走れない。個人のパッションだけでは誰もついてこない。皆さんが取り組んでいる「立志挑戦」もそういうことだと思います。志を立ててそれを掲げることによって、その志に賛同する協力者が集まってくるということですね。

今日のテーマのサブタイトルは「地域社会を起動させるために」というものです。起動と同じ言葉に起業というのがあります。でも起業というのはどちらかというとミッションが個人に留まったり、自分の枠の中に留まったりすることが多いんです。起業だけしてもしょうがないと思います。やはり地域全体を起動させる、地域を目

覚めさせるという発想が大切なんです。

では地域社会を起動させるためにどうすることが必要かという、所属や立場を超えた市民社会人としての自由な発想、これが必要なんです。市民社会人という言葉はあまり好きな言葉じゃないんですが、社会人といえば職業人という話になって、どうも学生が社会人になるというようなつまらない話になってしまう。僕は社会人であると同時に市民社会人という呼び方をしています。自分の職場の役に立とうなんて思っていると駄目ですね。悪いことじゃないんだけどもそれだけじゃつまらない。立志挑戦にもならない。それで給料が上がるにはどうしたらいいかなんて考えてもしょうがありません。



職場も大事なんだけれども、もっと自分の立場や所属を超えた自由な発想によって、見えない社会ニーズ、社会サービスを見えるようにしていく、顕在化していく、気付くということが大事だと思います。そのためには課題を発見するためのアンテナをちゃんと張るといことです。市民社会人としてアンテナを張ると見えないものが「ああ、こういうことが重要だね。いじめ、大変だよ。虐待は大変だよ」と色々なことが見えてきます。

## □グループディスカッション

テーマ：「私達は、地域社会を起動させられるか？」

(地域社会にどのような課題が隠されているのか、自分の所属や立場を越えて、「市民社会人」として、自由に発想してみる。発想した課題の原因を掘り下げ「真因」を探る。真因を解決するためどのような方策が効果的かを5つのグループに分かれて議論。)

チーム名	主な論点
起動戦士	ふれあいの場を創出する仕掛け・仕組みづくり。
バスで行こう	地域の公共交通機関の利便性向上。NPO法人「BusでいGO」の設立。
365歩のマーチ	路上問題の解決、交通弱者の救済。
シャーク	八戸鮫地区の活性化対策。地域おこしイベントの企画。
マッチングビル	子どもの多様な学びの場作り。

最後に、僕なりにNPOの真髓は何かを考えると、それは「来る者拒まず、去る者追わず。拘れども、囚われず」ということなんです。誰でもいらっしゃいというのがNPOの精神です。NPO法では、会員の資格の得喪に対して制限を設けてはいけなくなっています。「来る者拒まず」ですね。

日本の組織はNPOでも地縁組織でもそうだけど、あうんの呼吸で分かる人は分かるけれども、分からない人は分からないというのが多い。「寄らしむべし、知らしむべからず」ということですよ。「よってらっしゃい」とは言うけれど、実は知らしむべしで知らせる必要はないよね、というのが日本の組織文化にあります。何となく情報を与えない。しかし情報を与えないと参加はありません。だから関心あるサービスを提供すると同時に情報をどう提供するかが課題になってきます。そのために魅力的な活動をやったり、バザーをやって寄付を集めるということをやります。いかにして魅力的な人の集まる機会を作るかということですね。しかし「去る者を追わず」で、いったん去る者を追い始めると、あそこの団体に行ったら一回捕まったら逃げられなくなるから、ということになって問題が出てくるんですね。

またNPOは、いつの間にかこのミッションに囚われてしまうことがあります。「私達はこれをする団体です。だからそれ以外のことは関係ありません」という風にね。囚われすぎてしまう。自分がとても大切にいい取組をやっているという思いに囚われる。そうするとネットワークがあまり広がりません。ミッションに拘りつつも、それにあまり囚われすぎはいけません。「拘れども、囚われず」ですね。大変難しいバランスの問題ですが、僕が長い間NPOに関わってきた歴史の中で、それが真髓だと思います。

